

土木紀行

神通峡に映す歴史のアーチ —国登録有形文化財 笹津橋—

富山県富山市



笹津橋の概要

富山市内から国道41号を高山方面に進むと最初に神通川を渡る橋が「新笹津橋」で、そのすぐ下流に見えるアーチ橋が「笹津橋」である。笹津橋の歴史は古く、初代の笹津橋は明治19年に竣工し、現在の笹津橋は四代目として現在に至っている。

四代目の笹津橋は、橋長85mの鉄骨鉄筋コンクリートのアーチ橋で、昭和16年に架橋されて以来、地域の暮らしや産業を支えてきた。現在では上流側にある新笹津橋が、昭和56年に開通したことによって、歩道橋としてその役割を変えたが、



写真—2 施工中の笹津橋，アーチ部分の形が見えてきたところ

今もなお歴史あるアーチ橋として、神通峡に美しい姿を映し出している。平成12年には、その歴史的価値や土木構造物としての技術的価値が評価されて、国登録有形文化財の登録を受け、地域のシンボリック的存在となっている。

登録有形文化財としての評価

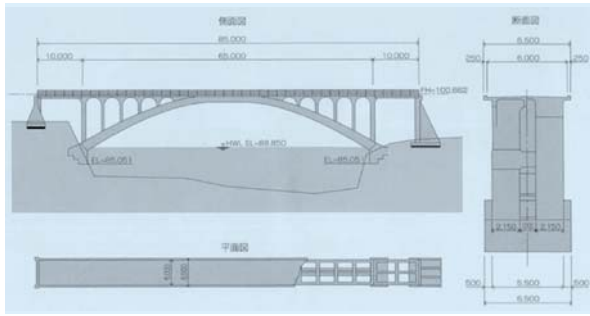
- 技術：現存する戦前2番目の大スパンアーチ
- 意匠：美しい渓谷にマッチした躍動感が大きいデザイン
- 歴史：長年、地域の産業文化の発展に貢献

設計諸元

- 路線名：国道41号
- 竣工年：昭和16年7月
- 橋長：85m
- 径間：3径間
- 幅員：6.0m
- 形式：メラン式鉄骨鉄筋コンクリートによる上路式固定アーチ橋
- 設計荷重：自動車荷重12t（適用示方書：大正15年）
- 設計者：高野務（当時若き土木技手であった高野務氏は、後に旧建設省道路局長、技監を務めた）



写真—1 優美なアーチと渓谷の自然に調和したデザインが特徴の笹津橋



笹津橋の歴史

(1) 初代笹津橋の架橋 明治19年

明治17年、初代県令国重政文は飛騨街道の整備に着手した。1間（2m弱）しかなかった道路幅を3間（約5.4m）に広げ、富山から飛騨へ南下する最初の難所である神通川の急流に笹津橋を架橋し、越中と飛騨の交流・交易を促進する画期的な事業であった。笹津橋については、川幅50間、水勢激烈の難所ゆえに、材料の準備、架設工事等に年月を費やし、ようやく明治19年12月初代木造橋の完成をみることとなった。しかし、この橋はわずか1年有余にして激流に耐えきれず使用不能となった。



(2) 二代目笹津橋の架橋 明治25年

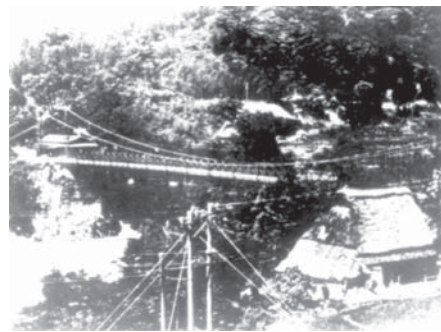
明治25年12月二代目笹津橋（木造吊橋）が誕生することになる。これは佐藤助九郎が自費を投じ、地元民の公益を図ったもので、これによって急速に越中と飛騨の文化交流をみるに至った。延



長55間（99.9m）、幅員3間3尺（6.05m）、有料の吊橋（賃取り橋）とし、通行料金は人6厘（商人2銭）、馬5銭であった。その後、日増しに激増する物資の運送と人々の往来により、明治末頃には老朽化し使用に耐えない状態となった。

(3) 三代目笹津橋の架橋 大正元年

大正元年県費により三代目の架橋が行われた。延長85.0m、幅員6.0mの鉄製の吊橋であった。この橋は老朽化により、昭和6年に大修繕が行われたが、昭和10年頃にはトラックの通行に重量制限が必要となった。



(4) 四代目笹津橋の架橋 昭和16年

現在の橋は、三代目の笹津橋より約40m上流に建造されることになったが、時はすでに日中戦争に入っており、軍事優先の時代の中で、四代目の笹津橋は陸軍部隊が進軍する際、戦車の通過が可能ないように設計されたと言われている。



写真—3 新笹津橋（手前）と笹津橋